

青森県下北地域における鳥獣害防止施設の特徴について  
Features of the birds and beasts damage prevention facilities  
in Aomori Prefecture Shimokita area

蒔苗 春彦\* 蛭名 芳徳\*\* ○松橋 敦\*\*\*

MAKANAE Haruhiko\*, EBINA Yoshinori\*\*, MATSUHASHI Tsutomu\*\*\*

### 1. はじめに

本州最北端に位置する青森県の下北半島(図1)は、豊かな自然環境と豊富な水資源を有し、県内有数の観光地として発展してきたが、文化や消費の要となる都市圏からの距離的な不利や、高齢化及び過度な人口流出等により、本来、自然環境と調和を図りながら結果として、「自然」と「里」の住み分けに寄与してきた中山間地域の農業が衰退してきている。



図1 位置図

Fig. 1 Location map

一方、下北半島に生息するニホンザルは、昭和45年に国の天然記念物に指定され、「北限のサル」としてその保護が図られてきたが、指定時の頭数(187頭)は年々増加の一途をたどり、現在では約2,400頭を数えるに至っている。これに伴い、大半の農地が山林に隣接する本地域では、農作物被害が常態化し、高齢化・過疎化とともに、農業離れや担い手不足を助長する大きな課題とされている。

### 2. 農作物の被害状況

下北半島におけるニホンザルの被害は、昭和35年頃から半島南西部のむつ市脇野沢に始まり、平成3年に佐井村、平成8年は風間浦村、平成10年の大間町とその範囲を北へ拡大し広域化している。主な被害作物は、イモ類(ばれいしょ)や野菜類(カボチャ、トウモロコシ)となっており、その他には米や豆などの穀物類にも被害が拡大している。農作物等の被害額は、平成8年の約9,000千円をピークに上昇と下降を周期的に繰り返しながら、平成26年現在では下降傾向にある。

### 3. 被害の対策状況

被害対策として昭和50~60年代には、巡視員による追い払いが中心であったが、平成6年にむつ市脇野沢で電気を利用した鳥獣害防止柵(以下、電気柵という)を設置し、平成8年にはその効果で被害が減少した。また、平成7年には佐井村でも電気柵を設置し、平成9年には被害額が約55%減少する効果が見られた。それを契機に、以降、風間浦村では

\*青森県下北地域県民局地域農林水産部 \*Aomori Prefectural Government Shimokita Regional Administration Bureau Regional Department of Agriculture, Forestry and Fisheries

\*\*青森県西北地域県民局地域農林水産部 \*\*Aomori Prefectural Government Seihoku Regional Administration Bureau Regional Department of Agriculture, Forestry and Fisheries

\*\*\*青森県上北地域県民局地域農林水産部 \*\*\*Aomori Prefectural Government Kamikita Regional Administration Bureau Regional Department of Agriculture, Forestry and Fisheries

キーワード：中山間地域、鳥獣害防止施設、ニホンザル

平成 10 年、大間町では平成 19 年に電気柵を設置し、被害の軽減が図られてきた。

しかしながら、4～5 年後には、再び被害の上昇傾向がみられた。これはネット式電気柵のネットの耐久性が 5 年程度とされていることから、電気柵の有効性もさることながら、その維持管理が重要であることがうかがわれる。

#### 4. 電気柵の種類と特徴

本地域における電気柵は、①金網式(写真 1)、②京大ネット式(写真 2)、③ネット式(写真 3)の 3 種類を主に採用してきたことから、以下にその種類と特徴を述べる。

①金網式・・・支柱や金網は耐久性に優れる、設置経費が高い、補修は専門性が必要、傾斜地では地面との隙間が発生、ネット最上部で感電。

②京大ネット式・・・軽量資材使用のため設置が簡単で安価、下草刈り作業は不要、支柱の迫り出し部分が大きく強度が弱い、積雪により倒壊、ネット最上部で感電。

③ネット式・・・支柱の耐久性が優れる、設置が簡単で安価、漏電防止のため除草作業が必要、草刈機によるネット切断に注意、ネット下段でも感電。

何れの方式においても、サルが+極と-極に同時に触れた場合に通電されることから、それぞれの通電機会は、金網式及び京大ネット式が 1 回、ネット式が複数回ということになる。また、ネット式の場合はネットが不安定なため、登るための時間を要することから、通電の機会が増えるメリットがある。

維持管理面では、ネット下方部にも通電される場合、漏電を防止するための下草刈り等が重要となる。また、ネット下方部にステンレス線が織り込まれていない場合はタヌキ等により破断される事例もみられる。

ネット式は、金網式の 1/2 の耐用年数、下草刈りににおいても一定の回数を必要とするが、本地域で近年急速に実績を伸ばしてきている。これは、冬期間のネットの取り外しが可能であり、二重構造の支柱は適度な強度と防錆効果を有している、雪による支柱の倒壊がない、下部ネットにはステンレス線が編み込まれているなどの理由によるものと思われる。

#### 5. おわりに

下北地域においては、様々なケースを経験してきた結果、侵入防止効果が高く、積雪地帯においても比較的耐久性があり、修繕の負担が少ないネット式が適していると思われる。

しかし、賢いニホンザルから継続して被害を防ぐには、電気柵だけに頼らず、施設の維持管理、群れの動向把握・追い上げ、収穫後はエサとなる野菜を残さないなどのソフト面の対策も重要である。

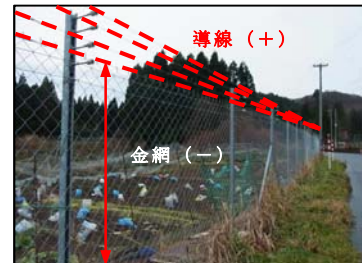


写真 1 金網式  
Photo 1 Wire netting type

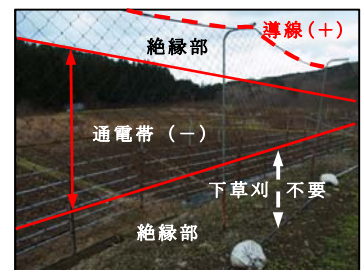


写真 2 京大ネット式  
Photo 2 Kyoto University net type



写真 3 ネット式  
Photo 3 net type